

総合的に評して、本書は序論で挙げた *mitdenken* に成功していない、またAの人間像を少しも浮かびあがらせようとはしていない、と言えよう。Aの肉声が一向に聞こえて来ない *mitdenken* などあり得るものだろうか。

著者は「序」にジルソンとヤスパースの名を挙げ、特にこの二人の体系的A論に対抗した、と述べているが、果して著者は、これら二人に対抗し得るA論を展開したか。その答は否定的である。西独中世哲学界を代表すべき著者が、定評ある Reclam から出版した本書である。期待が大きかっただけに、その期待を裏切られた思いでいるのは評者のみではあるまい。以下に München 大学教授 Helmut Kuhn の批評を紹介して、評者自身の結論にかえたい。

本書のA理解は皮相的である。著者の秘かな意図はヨーロッパ思想をAから解放しようとするところにあるようだ。また、ここ十年、西独はA研究の分野で沈黙しつつ来て来たが、その間、国際的研究は素晴らしい成果を挙げている。本書はその成果に一言も触れていない。西独はA研究にあって、すでに地方化してしまったのであろうか。翻って、本書は十年前の西独の研究水準に達していると言えるだろうか。その答は否定的である——。

H. Chadwick : *Boethius : The Consolations of Music, Logic, Theology, and Philosophy.*

Oxford : Clarendon Press, 1981, xv+313p.

石井雅之

本書は、M. Gibson(ed.) : *Boethius : His Life, Thought and Influence*, Oxford : Basil Blackwell, 1981 (チャドウィックによる Intr. を含む) とともにボエティウス

(以下B.と略記) 生誕1500年を期した出版である。各章は次のように題されている(括弧内は頁数)。I. Romans and Goths (68) ; II. Liberal Arts in the Collapse of the Culture(39) ; III. Logic(66) ; IV. Christian Theology and the Philosophers(49) ; V. Evil, Freedom, and Providence(31)。この構成と上掲の副題が示すように著者チャドウィク(以下Ch.と略記)はB.を全体像として把えなおすことを意図している。そしてB.の与えた後世への影響よりもB.その人がいかなる時代に生き誰から何を学びとっていったのかが問われている。ただしCh.は多くの場合、B.が誰の説に従ったかという判断は下さず、ただB.と共通の論点や論法が現存文献のどこにみられるかを事実として指摘してゆくにとどめている。こうしたCh.の方法は、本書で批判されているP.クルセル(以下C.と略記)の場合と対照的である。C.の場合、特に *Les lettres grecques en Occident*² (Paris, 1948 : 以下C I) では、B.の師はアンモニオス(以下A.と略記)だという確信が先行しそれに論証が追従しているくらいがあるように思われるからである(この傾向は *La consolation de Philosophie dans la tradition littéraire* (Paris, 1967 : 以下C II) では緩和されている)。

さて本書については筆者の知る限りでも既に R. Markus (*Times Literary Supplement*, Jan 8, 1982), J. Dillon (*Classical Review* 33, 1, 1983), P. Wormald (*Journal of Roman Studies* 73, 1983) の書評があるので、筆者は以下第III章を中心に若干の論点についてCh.の見方を紹介するにとどめる。

まずB.の師をA.とするC.の説についてCh.は、Messius Phoebus Severusの例(p. 20)からも想像はされるとしながらも、検証できるわけではないことを強調する。そしてC.のひとつの論拠であるB.とA.のテキスト上の照応の多くは当時の常套論法にすぎないとみている。のみならずB.のほうにのみみられる要素をも指摘する。例えば論理学の位置づけの問題である。B.は *Isag.* i (10, 2—5 Brandt) でも *Isag.* ii (140, 13—143, 7) でも論理学がオルガノンでもあり哲学の部分でもあるとする点ではA.の *APr.* (8, 15—11, 21 Wallies) の見解に一致する (cf. CI 272)。しかし、Ch. (pp. 108sq. ; 130sq.) によれば、例えば 'speculativae atque activae (sc. philosophiae) finis' (142, 11—12) という観点はこの問題においてA.にはみられないのである (cf. Rijk (*Vivarium* 2) 137 n. 2)。また別の例として *Isag.* i で

theoretice の対象領域の三段階を *intellectibilia*, *intellegibilia*, *naturalia* と特徴づけている (8, 8) 点に着目している。これらがギリシア語の *νοητά*, *νοερά*, *φυσικά* にそれぞれ相当することは明白だが A. にはこの語彙はみあたらないと Ch. は指摘する。その語彙のあるものとして Plot., Porph., Syrian., Procl. をあげているが、箇所の指示は不十分である。意図も B. と同じか否かが疑問として残る。

ところで *Cat.* についてはこれは Porph. の *Εἰς τὰς Ἀριστοτέλους κατηγορίας κατὰ πᾶσιν καὶ ἀπόκρισιν* (*Q & A Comm.*) に依拠しているという見方を Ch. も支持している。ただし *Q & A Comm.* に対応しない引用がありそれは Iamb. に由来すると Ch. は推定する (p. 126)。また *Cat.* に第二の註解があるとする推測も Ch. は認めている。そして P. アド発見の断片が *Simp.* と対応することから *Cat. ii* では Iamb. の所説がより一層摂取されたものと Ch. はみている (pp. 142 sq. cf. Hadot (*Archives d'histoire doctrinale et littéraire du moyen âge* 26) 19 sqq.)。ちなみに十のカテゴリーの区別について B. は *Cat. i* では Porph. に近く *Int. ii* では Iamb. に近づくと Ch. は指摘している (pp. 146 sq.)。他方 Porph. の *Int.* 註には B. と A. が共に言及していることから両者の共通点を Porph. に帰せる場合があることを Ch. は示唆する。さらには B. が Alex. Aphr. の著作を読んだのも Porph. の書に促されてのことだと推測する (Alex. Aphr. の著作を所有していたとみている)。また Porph. の *Thphr. π. καταφάσεως καὶ ἀποφάσεως* 註や *Pl. Sph.* 註も B. は知っていたとみている (cf. CI267)。総じて Aspasius, Herminus などを含めた Porph. 以前の諸説については B. は Porph. を介して直接間接に情報を得たとみるのである (p. 126)。

一方 Porph. 以後については Ch. の論述は一層慎重になる。*Int. ii* で B. が 5 回ほど言及している Syrian. 説は Procl. 以外の註釈家からの間接引用だと Ch. は推測する (p. 128; cf. CI268)。そして別箇所 (pp. 165 sq.) では, *Syll. Cat.* はやはり Porph. が主たる典拠だが *sylogismos* の *moods* については Them. に一致している (この点では A. も同様) という。そして *Syll. Cat.* 第 2 巻では B. は Them. の *APr.* を参照しているとみるのである (cf. Rijk, 29; Minio-Paluello (*Journal of Hellenic studies* 77)101)。さらに Ch. によれば *Top. Diff.* でも Arist. の *Top.* のもつ弁論術的価値については Them. が典拠と推測されるのである (p. 120)。他方

Archytas 文書について B. が Them. 説を知ったのは Syrian. の註釈を介してであると Ch. は推定する (p. 128)。他に誤謬に関する議論では A. が Syrian. に一致しているのに対し B. は Syrian. を批判している事実をも Ch. は指摘している (pp. 156 sq.)。ちなみに Procl. は概して師 Syrian. を批判することはないと Ch. は言う (p. 128)。

もちろん Ch. は B. が Procl. を読まなかったと言っているのではない。Ch. によれば従来 Epicur. に帰されていた *Cons. Ph.* I, 4, 30 の引用は Prod. (*Parm.* 1056, 10—16 Cousin) からのものだという。また *O qui perpetua* の典拠として Prod. *Tim.* を重視している (p. 129)。他にも Ch. は B. と Procl. の類似を随所に指摘している (pp. 50 ; 105 ; 107 et 211 ; 120 ; 145 sq ; 210 etc.)。

すでに述べたように B. と A. にみられるパラレルは両者が共に Porph. に依拠した場合と常套論法にすぎない場合ということで説明できると Ch. はみる。*Int.* ii, 361, 9 Meiser の ‘audivimus’ (*ms.*) についても Ch. は C. の読み方 ‘Ammonius’ (CI 277) を退けマイザー ‘Eudemus’ に同意している (p. 153. cf. p. 166)。*Int.* に A. の名が現われないことを C. は “le lustre de l’antiquité” の未だない者の名をもちださない伝統だとしている (CI 269) が、この点に関連しては Ch. は、B. が ‘auctoritas’ として名をあげるのは Pl. と Arist. であり場合によって Plot. もあげられそれに近い扱いを受けるのが Porph. と Iamb. であるという言い方をしている (p. 134 の *Int.* ii, 40 からの訳出は 15 行にわたる中略がなされている旨何らかの明示が望まれる)。B. と A. の顕著な相違としては A. が Syrian. を参照しつつ *Int.* 第 14 章を偽作と疑っているのに対し B. はその説に触れることなく他章との一貫性を強調していることがあげられている。しかも Porph. にこの章についての註がないという A. の報告する事実こそ B. の註解内容が第 14 章でにわかには貧困となる理由を説明するものなのであって、A. が使われていないことの裏づけともなると Ch. はみている (pp. 153 sq.)。また B. にみられる必然の意味の区別 (*Int.* ii, 241 ; *Cons. Ph.* V, 6, 91) を A. (*Int.* 153, 3 Busse) に依拠したものとする C. の説 (CI 293 sq. ; C II 217 sq.) も Ch. は認めていないようである (p. 162)。Ch. は Arist. *Phys.* B9, 199 b sqq. を確認するとどめている (C. は B. は Arist. の *Phys.* それ自体を参照しているわけではないとする : CI 294 sq. ; C II 218 sq.)。しかし別箇所 (p. 139) で Ch. は

Int. ii, 190, 13 ; 458, 27 ; *Top.* 1153BはB.が自ら *Phys.* に註したことを示していると強調する。他方 *Phys.* には Alex. Aphr., Porph., Simp. が註を書きおき Syrian. やA. も書いたことが Simp. によってわかることも確認している (cf. C II 217 sqq.)。また, aeternus と perpetuus を区別する議論での *Cons. Ph.* V と Simp. *Phys.* のパラレルを両者が共にA.の失われた註解に依拠したことに帰すC.の説 (C II 288) については, Ch. はやはりそれが検証できるわけではないことを強調している (p. 140)。

他方 Ch. は概して *Int.* はペリパトス派的な論法で書かれていることに注意を促し, B. は Porph. に促されて Alex. Aphr. を読んだとくり返す。B. と Alex. Aphr. の照応も随所に指摘される (p. 155. cf. p. 146 ; p. 159. cf. p. 166)。周知のように, Alex. Aphr. は神の予知に関して神は不確定の未来事を不確定のこととして知ると主張した (*de fato* 30, 201, 13 sqq. Bruns) 点で例えば Procl. (*de prov.* 63, 7 sqq. Isaac ; *dec. dub.* q. 2, 7, 35 sqq. ; 8, 11 sqq. Isaac) と著しく異なる。そして後者と同じ見方がB.でも *Int.* ii と *Cons. Ph.* V の両方に現われA.にも報告されている (*Int.* 132, 12) ことに関して Ch. は, この見方に関する限りでは Iamb. の創見とみているようである。しかし *Int.* ii になく *Cons. Ph.* V に現われる, 神の予知に関する議論を時と永遠の区別に結びつける見方については Prod. の影響を想定する (p. 163)。さらにB.の永遠の定義は Plot. (iii, 7, 3) に似ていると指摘しつつ同じではないとも断っている (p. 246 n. 6)。他方 *Cons. Ph.* II, 3 にみられる動物への転落という観念は Plot. には容認されたが Porph. や Procl. には拒否されたと指摘する。ところがその用語法だけからすればやはり Procl. (*Tim.* iii, 295, 30 Diehl) に近いというのである (p. 240)。それゆえ *Cons. Ph.* には “Boethius’ master Proclus” (p. 204) の何らかの仕方でのかなり細部にわたる影響があったと言うことはできるのかもしれない (cf. Gibson (ed.), p. 6)。

本書には, 旧来の研究からいわばボエティウスという生きた人間を救い出そうとする姿勢が一貫して伺われる。そしてもちろんここに触れることのできなかった多くの卓見が満ちている。なかでもB.と Aug. を比較しながらの論述は特筆されなければならないだろう。最後に第一刷の正誤表に漏れている誤記誤植脱落を気のついた範囲で付記しておく。p. 7. contempories→contemporaries ; p. 129. Sheil→Shiel ; p.

205. *Metaphysics* A1, 993 a 23-30→ α 1, 993 b 23-31 ; p.208. *Metaphysics* Z6, 103b 11-12→1031 b 11-12 ; p.216. *Confessions* (vi, 16, 28-9)→(iv, 16, 28-9) ; p.269. Hadot, P. ('Un fragment...' の掲載頁 (11-27) ; p.271. Isaac, I. →Isaac, J. ; p.281. Solmsen, F. ; *Die Entwicklung...* の出版地 ; Sorabji, N. →Sorabji, R. ; p.282. *Forschungen zur Platonismus*→*Forschungen zum Neuplatonismus* ; p.283. Vogel, C. J. de ('Boethiana' ...59-66.... →49-66 また野町啓「ギリシア的混合論とクリストロジー」『中世思想研究』25 (1983) 54頁註(9)に誤りが指摘されている p.199. *de gen. et corr.* 226A10→327A18 sqq., 328A25)。 (ISBN 0 19 826447X, ￡18)

Iohannis Scotti Eriugena Periphyseon
(*De Divisione Naturae*).

edited by I. P. Sheldon-Williams with the collaboration of
L. Bieler, Liber I—III (Scriptores Latini Hiberniae
VII/K/XI), Dublin, The Dublin Institute for Advanced
Studies, 1968/72/81, pp. x+247, 252, 324.

小田川方子

これは、9世紀のアイルランド哲学者ヨハネス・スコトッス・エリウゲナの主著『ペリピュセオン』（自然について）の一巻から三巻までのラテン語原文とその英訳および註である。第一、二巻は Sheldon-Williams によって刊行されたが、第三巻は彼の没後、残された英訳を含む草稿が O'Meara によって整理されて出版された。第四、五巻の出版もこれに続く予定である。

『ペリピュセオン』は、中世に「汎神論」と断罪され禁書となったため、最初の版はようやく1681年に Gale によって刊行された。これはケンブリッジに現存する12世紀の写本を底本としている。1838年には基本的にこのゲイル版に依った版が Schlüter によって刊行された。今まで最良とされていたのは、次いで1853年に